

8 特別支援学校教員が行う授業内での発達支持的生徒指導

河村真司・水野治久*

(要旨)

生徒指導の基本書となる生徒指導提要が令和4年に12年ぶりに改訂された。そこでは、生徒指導は学習指導と並んで学校教育において重要な意義を持つとされている。しかし、著者が支援学校の生徒指導主事を行っていた時から、依然として支援学校における生徒指導は事象が起きた時に行う「リアクティブ型」のものという認識があることを感じていた。そこで、本研究の目的を特別支援学校において授業内でどのような生徒指導、特に発達支持的生徒指導が行われているのかを明らかにすることとする。実際に附属特別支援学校の高等部教員がどのように発達支持的生徒指導を行っているかを調査し、整理を行った。

(キーワード) 特別支援教育、生徒指導提要、授業、発達支持的生徒指導

I. 目的

生徒指導提要(文部科学省, 2022)では、生徒指導は学校の教育目標を達成する上で重要な機能を果たすものであり、学習指導と並んで学校教育において重要な意義を持つものとされている。その中でも、発達支持的生徒指導は、特定の課題を意識することなく、全ての児童生徒を対象に、学校の教育目標の実現に向けて、教育課程内外の全ての教育活動において進められる生徒指導の基盤となるものである。発達支持的というのは、児童生徒に向き合う際の基本的な立ち位置を示している。すなわち、あくまでも児童生徒が自発的・主体的に自らを発達させていくことが尊重され、その発達の過程を学校や教職員がいかに支えていくかという視点に立っている。そのため、教職員は、児童生徒の「個性の発見とよさや可能性の伸長と社会的資質・能力の発達を支える」ように働きかける必要がある。発達支持的生徒指導では、日々の教職員の児童生徒への挨拶、声かけ、励まし、賞賛、対話、及び授業や行事等を通じた個と集団への働きかけが大切になるとされている。そこで本研究の目的を附属特別支援学校において教員が生徒に対して授業内でどのような発達支持的生徒指導を行っているかを明らかにすることとする。実際の授業の中で授業者がどのようにして生徒に対して発達支持的生徒指導を行っているか明らかにすることでどのような指導が求められているのかを考察し、今後の研究につなげていく。

II. 方法

1. 期間

令和6年10月から令和6年11月

2. 対象

高等部の教員6名の授業計8時間分での授業内におけるメインティーチャーの発言や生徒との関わりを対象とした。

3. 方法

著者がサブティーチャーとして入った授業において、メインティーチャーが生徒に対して授業内で行っていた発達支持的生徒指導を観察し、具体的な発達支持的生徒指導と思われる指導を記録に取り、生徒指導提要で発達支持的生徒指導を行う上で大切だとされている①児童生徒への挨拶、②声かけ、③励まし、④賞賛、⑤対話、⑥授業や行事等を通じた個と集団への働きかけの6つのカテゴリに整理した。

III. 結果

本研究においては、8時間分の授業において29回の発達支持的生徒指導が行われていることを確認することができた。またそれらを6つのカテゴリに分類することができた。(表1)

* 大阪教育大学 総合教育系

表 1 実際に授業で行われている発達支持的生徒指導

生徒指導提要で求められる 発達支持的生徒指導の働きかけ	授業内での実際の働きかけ	生徒指導提要で求められる 発達支持的生徒指導の働きかけ	授業内での実際の働きかけ
児童生徒への挨拶	名前を呼んでのあいさつ	対話	生徒発信の発言に関するやりとり
	名前を呼んでのあいさつ		よい発言に関するレスポンス
	名前を呼んでのあいさつ		個人の疑問を全体に共有する
声かけ	よいところはすぐに声をかける		他の人の発表を聞くように声をかける
	全体の中での個別に対する声かけ		規範を守らない生徒への声かけ
	生徒の変化への気付き		生徒とのポジティブなやり取り
励まし	つまづきに対する個別支援		生徒の発言から話のやり取りをする
	発表に対するレスポンス		生徒の発言から意見・意思を汲み取る
賞賛	正解に対してすぐ褒める		生徒の質問を広げる
	本時の説明を受けてできていることを見つける		質問に対するコミュニケーション
	具体的なフィードバック	授業や行事等を通した個と集団への働きかけ	導入部分での授業内容の提示
	正解時の称賛		自分を出せる安心な環境作り
	発表したことに対しての称賛		人前で発表する機会を設ける
	出来たことに対する称賛		答えられるまで待つ
			得意分野における発表機会を設ける
			各自の進捗具合の確認
			指示が完了するまで待つ時間を作る

これらは、生徒主体で授業展開を行う中で、生徒指導の目的である児童生徒一人一人の個性の発見とよさや可能性の伸長のために必要な発達支持的生徒指導であると考えられる。

児童生徒への挨拶では、挨拶する際にただ挨拶するだけでなく、名前を呼んで挨拶している場面が3項目見受けられた。

声かけでは、生徒の発言や行動に対してよいところはすぐに声をかけたり、個別に声をかけたりする場面、授業内で見られた生徒の前向きな変化に対する気付きを生徒に伝える場面が見受けられた。

6つのカテゴリの中でも、6項目行われていた賞賛や10項目行われていた対話が多く行われていることが明らかになった。正解に対してすぐ褒める、正解時の称賛などの生徒の学習活動に関するものから、発表したという行動自体に関するものまで、常に生徒を賞賛するために授業者が配慮していた。また、授業を展開していくにあたって授業の進行だけでなく、その中での生徒との対話を大切にしていた。授業に関する質問から話題を広げたり、上手く思いを伝えることのできない生徒の発言からその生徒の意見を汲み取るなどして対話を大切にしながら授業が展開されていた。授業の中での生徒の発言を逃さずに、授業に関連させて対話をしたり、個人が疑問に感じた内容を賞賛したりしながら全体に共有するなどの活動も行われていた。

授業や行事等を通した個と集団への働きかけでは、自分を出せる安心な環境作りや人前で発表する機会を設ける場面が見受けられた。導入部分での授業内容の提示では、スライドを用いて視覚的にわかるように提示されていた。また、今回の研究では、生徒指導提要で求められている発達支持的生徒指導の6つのカテゴリ全ての項目を特別支援学校の実際の授業の中でも行なっていることがわかった。

IV. 考察

今回の分析の結果から、支援学校において授業者が行っている発達支持的生徒指導が29項目示された。これらの項目は特別支援学校の教員として生徒指導や授業を行う観点からも必要な項目であると考えられる。特に賞賛や対話が重視して行われていることが結果に表れた。特別支援学校の教員として、生徒と共に成長していくためにも、まずは授業の中でその生徒の発言や行動をよく観察して生徒の変化に気付くことこそが発達支持的生徒指導を行う上での大切なきっかけになると思われる。今回の実践は、特別支援学校高等部の授業内での発達支持的生徒指導を対象を絞って行った。今後は、今回の結果を基にチェックリストを作成し、特別支援学校の授業において発達支持的生徒指導を充実させていくことが課題である。今回の結果を特別支援学校の教員が授業の中で生徒指導の充実を図っていくための一助となるように、研究を進めていく。

VI. 参考文献

文部科学省 2022 生徒指導提要